

人と仏との出会い(下)

2002年9月7日 岡本英夫先生

一四 仏は私の思いを超えた存在

韋提希^{いたいけ}は阿難と目蓮を呼びますが、これは本気で呼んだのです。この二人に来てもらえば慰めてもらえると。いかにそこに自己の思いを貫こうとする狡猾^{こうかつ}さが潜んでいるにせよ、これが、韋提希の精一杯の、極限の態度だったのでしょう。韋提希自身には、もうこれ以上も以下も取るべき態度がないのです。

しかし、お釈迦様は先程のように、韋提希とは、即ち人間とはどんな存在であるかを明らかに御覧になっていますから、阿難と目蓮を遣わして慰めさせても救われないということは分かっています。そこで、お釈迦様はどのような行動に出られるのか。

お釈迦様は、韋提希から要請のあった阿難と目蓮を連れて、自らも耆闍崛山^{きしゃくっせん}から王舎城のお城へ行かれるのです。韋提希は泣き伏している。その泣き伏して下を向いている間に、牢の中までお釈迦様達がやって来られます。

しばらくして、韋提希が頭を上げます。上げたら目の前に、自分が頼んでもいないお釈迦様に来ておられるんですよ。しかも、自分が頼んだ二人を傍らに置いて自らは真ん中に。

韋提希はこれまでお釈迦様のことを「世尊」と呼んでいました。ところが、ここに現われて来られたお釈迦様を、経典は世尊と言わず、「釈迦牟尼^{しゃかむにぶつ}仏」と言っています。お釈迦様の呼び方は世尊で構わないんですよ。確かにいろいろな呼び方があるんですから、仏と呼んでもいいし、世尊や如来と言ってもいいわけです。世尊と呼んでも何等構わないけれども、問題は、韋提希が「世尊」と呼ぶこの言葉の中に韋提希自身^{なんら}が与えていた意味が、実はお釈迦様の真の内容を指していなかったということがあるのです。

「世尊」は皆が使う呼び名です。それを韋提希も使っていたのですから、どういう意味内容で使っているのかは、外観では分からない。そして実は、この時に現われたお釈迦様は、韋提希が「世尊」という呼び名で思っていたお釈迦様ではなかったんだということを経典は表わすわけです。お釈迦様はどんなお方か、そ

れは「釈迦牟尼仏」なんですよということを言うわけですね。

釈迦牟尼仏というのは、その意味を見るとき、一応、「釈迦」と「牟尼」と「仏」の三つに分かれると思います。「釈迦」というのは固有名詞ですね。お釈迦様は、インド北部の釈迦族の出身で仏陀になった人で、釈迦という部族の名前がそのまま名前になっている。ですからこれは一応固有名詞です。

問題は、大事なことは、「牟尼^{むに}」という言葉です。牟尼というのは、梵語の Muni の音写ですね。牟尼というのは、直訳すれば沈黙と言う意味のようです。沈黙ということは涅槃^{ねはん}を表わします。涅槃^{ねはん}真実の世界。この世界の一番根源とも言うべきで涅槃^{ねはん}真実の世界、それが牟尼。

その涅槃^{ねはん}の世界から私達の為に来たり現れたという意味で「仏」というわけです。仏のことを如来とも言いますね。この如というのが涅槃^{ねはん}真実の世界です。真実の世界から私の為に来た具体的なお方ですね。お釈迦様とは、真実の世界から私の為に現われて下さったお方、これがお釈迦様の正体なんだということを表わしているわけです。

これに対して韋提希が、「世尊」と言って、どのような意味を「世尊」という言葉の中に与えていたかと言うと、「釈迦牟尼仏」の中、「釈迦」は分かっても「牟尼仏」が分からないのです。涅槃^{ねはん}の世界から私の為にということが分からないんですよ。韋提希にとってお釈迦様は、大変な人、偉い人、偉大で本当に尊敬すべき人ということは、雰囲気とか、皆もそう言ってるので分かるんだけど、偉大であって、尊敬すべきだという、その中身が分からないんですね。

何故偉大なのか、何故尊敬すべきなのか。それは「牟尼から現われた仏」なんだということなんですけれど、そこが分からなかったんですね。そこでこの経典は、韋提希が頭を上げて目の前にいる釈尊を見たその瞬間の場面を表わすのに、両者の認識の違いを対照的に表わしたのでしょう。お釈迦様は韋提希のために涅槃^{ねはん}真実の世界から現れたお方。韋提希は、お釈迦様のその正体が分からず、自分の思いで単に尊く偉大な人と思っている。この違いです。

一五 阿弥陀の本願を説くために現れたお釈迦様

さらに、お釈迦様のお姿はどうか。身が紫金色^{しこんじき}なんです。そして蓮華の上に

坐しておられる。お釈迦様はどのようなお方であるか。そのことは文章で現わしてもいいところなのですが、それを今、身の色がどうであり、座が何であるかで表わしている。非常に便利な表現方法ですね。逆にこれをほどいて言葉で現わすのが内容豊かで大変になります。

先ずお釈迦様を表わす構造です。蓮の華があってその上にお釈迦様が坐している。蓮の華という土台あるが故に、お釈迦様は上にいることができている。そのような構造ですね。これは何を表わすのでしょうか。土台あるが故にその上にあることができる。つまり、土台が因となり、その因あるが故に果がある。蓮の華が因、原因を表わすわけです。これあるが故に紫金色のお姿をしているお釈迦さまという果がある。このような因果関係を表わしているのです。

そして紫金色というのは、阿弥陀を表わす色です。しかし、今はお釈迦様です。お釈迦様が、単に、お釈迦様個人として現れたというのではなく、阿弥陀の本願として、阿弥陀の本願を韋提希に届けようとして現れた、ということでしょう。お釈迦様のこの世に現れた本懐というのは阿弥陀の本願を説くことであった。それが今、示されているわけです。苦しむ韋提希に対して、韋提希を真に救う阿弥陀の本願を説くために、そしてそのことが自らこの世に仏陀となって現れたお釈迦様の願いだったのです。

そのお釈迦様が蓮華の上にありますというのはどういうことでしょうか。蓮華が因を表わすわけです。今、お釈迦様は、実質的には阿弥陀の本願を表わしていますから、因とは、阿弥陀の本願を生み出したもの、ということになります。阿弥陀の本願、それを南無阿弥陀仏と言うんですね。

私達は南無阿弥陀仏という阿弥陀のはたらきを受けることによって、初めて目覚めということがおこってくるのです。自分で自分を見て目覚めるということは、ありそうですが、ありえません。なぜなら、自分を見る「自分」も目覚めていないからです。目覚めていない者が目覚めていない者を目覚めさせるということはありませんね。眠っている私が眠っている私を起すということはない。側にいる起きている人から起こしてもらわなければならない。目覚めている「他」なる者から目覚めさせてもらわなければならないのです。

南無阿弥陀仏というはたらきは何故起ったのか。これは私達が仏教の教えを聞

いていく上で最も分かりにくい問題かもしれません。しかし同時に、最も大切な問題といえるでしょう。なぜ人が、南無阿弥陀仏と自分の口で言えば救われるのか、この問題は、私たちの歩みの初めにおいて、大きく問いかけてくるに違いありません。考えても考えても分からない。阿弥陀の本願が南無阿弥陀仏とその全体をもって私にはたらきかけてくる。私はそのことに気づいて南無阿弥陀仏と声に出せば救われる・・・まったく大いなる謎と言わねばならないでしょう。

一六 なぜ阿弥陀の本願なのか

なぜ南無阿弥陀仏なのか。なぜ阿弥陀の本願なのか。その理由をあらわしているのが、「蓮華」で表わされている世界なのです。仏様は真実の智慧によって私たちをご覧になった。そして明らかにされた私たちの本当の姿、正体はどういうものであったか。それは、真実を無視する深い無明の心を根本に持ち、自己中心のあらゆる煩惱が満ちはたらき、そのために、迷いと苦しみを繰り返して生きるだけで、真に生きることのできない存在であると見られたのです。

私たちがこのような存在であると明らかに見られた瞬間、仏様は、あたかも胸引き裂かれるような思いを持たれ、どんなことがあってもこの者を救いたいと願われた。真に生きる者たらしめたいと願われた。それはこの世界の最も根源の、最も根底から私たちを支え、湧き起こる動きでしょう。これが大悲の心です。ここに真実の真実たる所以があるのでしょう。

私たちはこの世にあってどのような存在なのか。それは、真実によって支えられ、真実の起こす大悲の心によって支えられているという位置関係を持ってこの世に存在しているのです。決してひとりぼっちではない。このことの認識は、はかりしれなく大切なことだと思います。

この大悲の心によって仏様は、何によって、どんな方法で私たちをして真に生きる者たらしめることができるのかを考えに考えられ、求めに求められた。そこには、あらゆる闘いと忍耐と努力と精進があった。そしてついに阿弥陀の本願・南無阿弥陀仏のはたらきによってあらゆるものを救い、真に生きる者たらしめることができることを明らかにされたのです。

その南無阿弥陀仏としてはたらくのが阿弥陀仏。その阿弥陀の本願の教えを、

苦しみのまっただ中にいる韋提希に伝えようとして自らやってこられたのがお釈迦様。従って、お釈迦様のお姿を、身は紫金色、華座^{けざ}の上に乗ります、と表わされたのです。

一七 出会うべき真実とは何か

韋提希を初め、私たちが会って行く仏様は、このように表わされているのですね。真実に出会うところに人間の救いがある、というような言い方をするとき、その出会うべき真実を因と果という内容で立体的に表わしているのです。なぜなのか。「真実に出会う」だけではいけないのか。

真に生きたいと願う私たちの要求からすれば、果の阿弥陀に出会うことができれば、それで十分だという思いが起りやすいでしょう。しかし、それだけではいけない。そこでとどまってはいけないのです。真実はなぜ私を救うのか。果の阿弥陀はなぜ私を救うのか。阿弥陀のはたらきである南無阿弥陀仏はなぜ私を救うのか。この問題が答えられなければなりません。私を救ってくれる者がいるから救ってもらうんだ。救ってもらえさえすればそれでいいんだ、というのでは本当の救いとは言えないでしょう。

私を救う者は、なぜ私を救おうとするのか。ここに明確な理由がなければなりません。そうでないと、ただ救われただけでは、私はその者の奴隷になっただけにすぎないのです。なぜその方が私を救おうとされるかの理由も分からずに救われるということは、内容は「救われる」という有り難く結構なことですが、要するに、その方のなすがままになっているだけでしょう。それでは私の「独立」という真の救いにはならない。人間として真に生きるという「独立」がそこにあるのではなく、私を救う者に対する「隷属^{れいぞく}」があるだけではないか。これは決して真の救いとは言えませんね。

大切なことは、最も大切なことは、阿弥陀の本願・南無阿弥陀仏となって私を救うことがそのものにとって必然であった存在がましますということです。それを、先ほどは、「この世界の最も根源の、最も根底から私たちを支え、湧き起こる動き」と申しました。その「動き」は何によって構成されているかといえば、真実ならざる私たちのありのままの姿を明らかに見る智慧と、見出された真実な

らざる者に対してこれを救わんとする大悲となって表れる慈悲と、具体的にその私たちを救うことのできる本願・南無阿弥陀仏となったださる方便のはたらきによって構成されているのです。

即ちそこには、飾ることのない私そのものがいます。正真正銘の私そのものがいます。ついに私が出会っていくべき、目覚めていくべき私自身です。本当の私そのものがここで明らかにされ位置づけられているということ、これがこの「動き」の原点です。華座は、阿弥陀の本願を生み出す因の世界を表わしているわけですが、その因の世界を構成しているさらに因が「私」なのです。

なぜ、私を救おうとする動きがこの世の最も根源のところから起ったか。それはこの私がいるからです。私が、真実なるものをまったく無視し、真実ならざる自己にどこまでも立って、その無明のままに傍若無人^{ぼうじやくぶじん}に人生を生きている。愚かといえばこれほど愚かな者はいない。罪悪^わといえば、これほど罪悪な者はいない。この私自身を、阿弥陀に対してお詫びをする、その懺悔^{さんげ}こそが、華座で表わされる因の世界が私に求めていることなのでしょう。

根源からの私を救おうとする動きに対して、私は私の全体をもってお詫びをする。それが私という存在における最も根源の次元での行為。私において根源的というだけでなく、この世界において根源的、世界の根源であるその「動き」と同じ根源という次元の行為なのではないか。「根源の動き」と同じ次元を私たちにおいていえば、この懺悔ではないか。だから、根源的懺悔というのでしょうか。

この根源的懺悔によって、真実ならざる者の上に、真実を憶念して生きる歩みが生まれてくる。自らの上に向けられている阿弥陀の願い、その願いを生み出した大悲の心を知らされて生きることができる。さらに、その大悲を生み出した真実ならざる私そのものに出会い、人間と生まれこの人生を生きていくことのはかりしれない厳肅さの中を、申し訳ない我が身であることの懺悔と、それ故の大悲の願への感謝と、真に生きることへの喜びに満ちた願いと、賜ったこの世界にできる限りの恩返しをしていこうという活動の歩み、これらと共に生きていくことができるのです。

一八 仏のすべてを目の前にして

泣き続けた韋提希が頭を上げてみると、目の前にお釈迦様が来ておられた。韋提希は、これまで自分が思っていた「釈尊観」で対応するのですが、じつは、ここに現れたお釈迦様は韋提希の思っていたお釈迦様とはまるで異なる存在であったわけですね。韋提希のために涅槃真実の世界から阿弥陀の本願をもって来られた方。本願の教えを説くために、ただそれだけのためにやって来られた方だったのです。しかも、蓮華台の中に韋提希の何たるかを明らかにしておられての上です。

韋提希の前に現れたお釈迦様のところには、韋提希に教えを説くのはこれからであるにもかかわらず、既に、説かんとする教えのすべてが表わされているのです。即ち、本当の韋提希の姿、それを救わんとする大悲、大悲ゆえの本願をうち立てられるまでの歩み、韋提希を救う力を持った本願・南無阿弥陀仏。そして、それらのことを韋提希に届く教えとして説かれるお釈迦様という人。すべてがここに揃^{そろ}っているのです。

私たちの場合も、まさにこのようなことなのでしょう。私の前に仏法を勧める方が現れる。私は「ふん、仏法なんて、あんなもの！」とって顔を背ける。しかし、私の顔の前には、三千年の仏法の歴史があるのです。間違いなく証明をされ続けてきた真実の歴史があるのです。それを私は、「ふん」という、心の中で起こるたった一つの小さな動きで無視してしまう。大きな大きな、もうこれしかないという宝を、気ままな思い、先入観という自分勝手な考えで、いとも簡単に葬ってしまうのです。さらに、それでも私の前に立ち続けるその方に対し、罵声をすら浴びせることになるでしょう。いかに真実なるものから遠いところにいることであるかということですね。

長いあいだ、尋ね求め、ついに真実に出会って生の凱歌をあげてこられた無数の人たちの歴史を背後にして、よき方が、阿弥陀本願の教え、南無阿弥陀仏があなたを救うのですよと仰っても、私には分からない。私自身も、まさにそのような一人でした。

そうして、あろうことか、その仏教に、私の苦しみの原因をさえもっていくのですね。しかし、そのようなことをしても、その方は私を受け入れてくださり、教えを説きに説かれて、私が南無阿弥陀仏を私の人生の最大の課題にする歩みを

勧めてください、その歩みを調べてください、ついに南無阿弥陀仏を明らかにしてくださいなのです。

そういう意味合いで、韋提希の前に現れたのは、すべてを内に孕んだ南無阿弥陀仏であったとも言えるでしょう。仏教との出会いは、どう表現していいかわかりませんが、本当に大事な場面ですね。しかし、必ずしも私たちは、初めはわからない。従って、無視し、否定さえします。しかし、その方は、倦むことなく、私の閉じられた心の扉を叩き続けるのです。

一九 韋提希の存在自体の願い

目の前に現れたお釈迦様が何であるかが韋提希には分からない。釈迦牟尼仏であることが分からないのですね。この仏との出会いの時、韋提希はどのように反応をしたか、経典はそれを二通りで表わします。釈迦牟尼仏を受け入れる韋提希と、受け入れない韋提希です。この二つのことが同時に韋提希の中に、はっきりとした輪郭をもって強く起ってきます。

先ず、仏を受け入れる方を見てみましょう。韋提希はお釈迦様が釈迦牟尼仏であることが分からない。身の紫金色、立っている座が華座であることの意味が分からない。だからといって、韋提希の全体がまったく仏の存在を受け入れないかということ、そうではないのです。表面の意識では受け入れない。しかし、韋提希のもっともっと深い本心と言うか、韋提希の存在それ自体の願いとしては、釈迦牟尼仏を受け入れるんですね。即ち、阿弥陀の本願を受け入れるのです。

そのことを表わすのに、経典は独特な表現をします。お釈迦様が韋提希のところに現れたところ、帝釈天や梵天という天人たちが現われ、お釈迦様が来られたことを歓迎するんです。そして、韋提希に因^よって自分たちの本当に聞きたい教え、それはこれまで聞いたことのない教え、その教えを聞くことができるのだと、大喜びをして天から花びらをたくさん降らして大歓迎する。そのように表わされています。

では、天人とは一体何者か、ということになりますね。それは、経典には直接は書かれてはいないようですが、次のように受け取ることができるかもしれません。即ち、韋提希の意識よりももっと深い本心、あるいは韋提希の存在それ自体

の願いを天人で表わしたのではないかと思えるのです。

天人達が、韋提希に因って自分たちの心の底から聞きたい教えを聞くことができるのだといいます。ここには、韋提希と天人が登場して述べられています。しかしこれは、韋提希の中における韋提希と天人ではないかと思うのです。混乱を避けるために、後の韋提希を括弧付きで申してみます。即ち、韋提希という人の中に、「韋提希」と天人がいるということですね。韋提希は、その存在の内に、「韋提希」というあり方と、天人というあり方の二つを持っている。そして、天人は阿弥陀の本願の教えを聞きたいと願っており、「韋提希」の方はまったくそうではない。

その天人が、「韋提希」に因って本願の教えを聞くことができると言っているのです。即ち、韋提希の存在それ自体の願いは何によって全うすることができるのかといえば、「韋提希」によって、つまり、仏が何であるかが分からず、自分の思いでどこまでも生きようとしているその人間のあり方を「因」として、それ故に全うすることができるのだということでしょう。

それは言い換えれば、仏を無視する心あるがゆえに、私たちは仏に出会うことができるということですが、韋提希の仏を無視する心が因縁になって、お釈迦様は教えを説いてくださる。その教えは、仏を無視する心に目覚めよという教えです。この教えによって、韋提希は遂に仏を無視している自己に目覚め、阿弥陀に出会っていくことができるのです。この教えが方便の教えと言って、この経典を決定づけている教えなのですが、今はそこまでは触れないことにします。

二〇 私の求道の歩みをとめるもの

次に、仏を受け入れない韋提希です。頭を上げてみると、予想もしていないお釈迦様が目の前に来られていた。そこで韋提希は何をするか。一つは自ら瓔珞ようらくを断つということをしなす。瓔珞というのは、王妃の位を象徴する装飾品ですね。この瓔珞をなぜ自分が断ち切ったのか。断ち切るという行為にどんな意味があるのか、ということですね。

瓔珞は王妃の位を象徴するものですから、これは誰も断ち切る事はできないでしょう。できるとすれば王様だけだと思いますね。しかし韋提希はこの時、自分

で断ち切ったんです。もうこんなものはいらないということでしょうが、それだけでなく、これがあったばかりに、という後悔の思いもあったのではないかと思います。

韋提希も、王妃とはいっても一人の人間ですから、その人生にいろんなことがある。いろんなことに出会って、自己の運命を考え、生きる意味を問うこともあったでしょう。本格的に求道を始められる機会はいくらでもあったかもしれない。しかし、真剣になって求め始めた時、いつもこの瓔珞にぶつかり、瓔珞が邪魔になったのではないか。即ち、自分は王妃であって、何不足ない生活ができています。それこそ、両手を上げてじっとしておれば、周りの者が服を着せてくれるわけですからね。私など、家で手を上げてじっとしていても、誰も服を着せてくれません。寒いだけです。

真剣に自分の人生を考えようとして、考えを押し進めてゆくと、すぐに自分は王妃であるんだと、何不足ない人生を送ることができるんだ、それなのに人間の生きる意味は何だろうかとか、そういうことをどうして考える必要があるかということになるわけです。それで考えるのを止めてしまう。又、何かの因縁があってそういうことを考え始める。すると又、王妃であるということにぶつかって止めてしまう。

ですから、これまでに本当に求め続けてゆくというチャンスは何度もあった。けれども、全て王妃であるということが結局邪魔になったんだと。だから、王妃であるから求めなくてもいいんだとなった時に、自分ながら心の底では不本意であり、憤りを覚えつつ、ずっと心の底でそのように思いつつやって来たのではないのか。

それが今、真実を求めていくことを象徴するような釈迦牟尼仏というお方を前にして、自分はこれまで一体何をしてきたのかという、大変な後悔の思いがどっと溢れてきたのではないのでしょうか。チャンスは幾度もあったのに、王妃であるという、いわゆる世間のことに自分は負けてしまって、本当に道を求める求道をしなかった。そのことに対する取り返しのつかない後悔の思いが一挙に湧いてきたという感じですね。それで自ら瓔珞を断ち切るわけです。

このことは、私達もまた同じではないかと思えます。私において「瓔珞」とは

何か、という問題ですね。求めようと思って歩んだんだけど、何かにぶつかって結局求めるのを止めてしまった。私の歩みを止めさせたものは何かという問題です。韋提希が瓔珞を絶ち切ったということは、私たちにそういう問題を考えさせることになると思います。

これは皆さん、それぞれお考えになると思いますが、私はそれはやはり名利心みょうりだと思えますね。瓔珞とは結局のところ名利心ではないかと思っています。名利心の裏返しは自己防衛でしょう。その両面が、場面に応じてはたらくわけです。名利心がはたらいてそれ以上歩めなくなる。また自己防衛の心がはたらいて、歩めなくなるわけです。しかし、それは皆さん、いろいろあることだと思えます。

二一 立脚地を持たずに生きてきた

次に、韋提希の取った態度は、拳身投地し号泣するということです。拳身投地とは身を挙げて地に投げることですが、これはさらに、地に投げて、投げた後、えんてん婉転、即ち転げ回るのでね。座っていた韋提希が立ち上がって身を踊らすように地に投げ、そこでジッとしているのではなくて、転がり回るのでね。そうしながら号泣する。そういう姿をとるわけです。凄まじい姿です。

これは、自分の人生の立脚地をまだ持ち得ていないということを表わしているのだと思えますね。じっと坐っておれば、そこが私の立脚地という意味になります。また身を地に投げて、投げたそこでじっとしておれば、そこがまた立脚地という意味を持つことになります。立脚地がないのですから、地に対してじっとしておくことができません。ですから、身を投げ、そこで転がり回るので。

立脚地ですから、本当にそこに立つことによって、動揺しない不動の生き方ができると。そういう不動の生き方ができれば、その場所こそ私にとっての真の立脚地ということになるわけですね。その立脚地をまだ持っていないということを表わしているのでしょうか。地に倒れてじっとしているとそこが立脚地かということになるんですから、いやそうじゃないんだと言って転がり回る、これは壮絶な場面ですね。このような身体の動きで立脚地がない自分に猛烈に気づいてきたということを表わしているんですね。

二二 被害者意識・愚痴・怨み・責任転嫁

韋提希が取ったもう一つの態度は、目の前にましますお釈迦様に対して、愚痴と怨みをぶちまけるといことです。次のような発言です。

「世尊、我れ^{むかし}宿何の罪ありてか、この悪子を生ぜる。

世尊、また、何らの因縁ありてか、^{だいばだつた}提婆達多と共に^{けんぞく}眷属たる」

世尊、即ちお釈迦様に対して、「私にこれまでどんな罪があつてこのような悪い子が生まれたのですか。また世尊よ、あなたは一体どういうわけで提婆の眷属(親戚)なんですか」と。

前半の「私にこれまでどんな罪があつてこのような悪い子が生まれたのですか」という言い方。これが私達がおよそ何らかの問題に出会つた時の^{じょうとう}常套文句ではないでしょうか。私達は皆、これと同じことを言っているように思います。責任転嫁の代表的な言葉なんですよ。苦しいこと、辛いことなどに出会つと、どうしてこんなことを自分はしなければいけないのかと言うんですね。なぜ自分だけがこういう目に会わないといけないのか分からないと言う、あの^{せりふ}台詞です。

そして、分からないけども何か原因があるにちがいないと言うんですよ。原因がはっきりしなければ落ち着けない。原因は実は自分にあるんですよ。しかしそれに気づかない。だから、その原因を他に持っていく。しかも、一番自分にとって大事な人のところへ持ってゆくのです。親がこうしたからだ、先生がこうしたからだと、そういうところへ持ってゆく。これが私達の、いわゆる被害者意識ということですね。自分を悪いところへ置かない。人を悪く言い責任を転嫁するんですね。

この場合の責任と言へば、阿闍世をあのような悪い子にしたのは誰の責任か、ということですね。具体的には父親を殺そうとし、自分をも牢に閉じ込めるといことをしたのは何が原因かと言へば、それは^{びんばさら}頻婆娑羅王と韋提希が中心になつて、かつて仙人を殺した。そして阿闍世が生まれた時にこれも殺そうとしたということなんですよ。それが原因なんですね。しかし、そこが本人には分からないんです。私にこれまで一体何の罪があつたと言うんですか、何にもないじゃないですかと言うわけですね。自分の責任を転嫁して、そして自己を正当化する。こういう考え方をするのが人間なのでしょう。

提婆は阿闍世をそそのかした人で、それによって阿闍世が自分を牢に閉じ込めるということになった、その発端を作った男です。その悪い提婆とお釈迦様が共に眷属であると。この眷属と言うのは一応二つの意味があります。一つは、お釈迦様と提婆は従兄弟同士です。お父さん同士が兄弟です。そういう意味で眷属。もう一つは、提婆はお釈迦様の仏教教団の弟子です。しかも、弟子の中のトップの位置を占めるほどの存在です。

ですから、提婆は釈尊にとって従兄弟^{いとこ}であり、教団の弟子である。どちらもあなたが監督しなければいけない立場ではないか、というわけです。それであるのに私にこのようなことが起って、どう責任を取ってくれるのか、こういうことですね。この二つのことで、お釈迦様をがんじがらめにして責任を負わせようとするわけですね。

見濁^{けんじよく}という言葉があります。この世は五濁悪世だと言いますが、その五つの濁りの中の一つがこの見濁です。見と言うのはものの考え方ですね。私達のものの考え方が濁っている。これが一番基本になって、それで全体が濁ってしまう。

どのような考え方をするのが私達かと言えば、私と相手がいて、そして私の考えが間違っていて相手の考えが正しい時、こういう時に一番その見濁たる所以がハッキリ出るんですね。自分の考えは間違っていて相手が正しいんだから、正直に私は間違っていました、あなたのでいいんですとなりそうなんですが、しかし、見濁ではどのように見るのかと言うと、私の考えは全部正しい、あなたの考えは間違っていますと、このように言うんですね。徹底しています。いかに私の考えが全て間違っているても、私の考えは全て正しいんです。また、相手がいかに正しくても、あなたの考えは間違っていると言う。これが人間のものの考え方なんだと。これでこの世界が濁るというわけです。

そういうことなんですね。自分に大変な罪があるのに、なぜか本人はそれに気がつかない。気がつかないどころか、お釈迦様が悪いんだと言ってゆくわけです。自己を正当化するのです。お釈迦様が提婆をしっかり監督しないから、提婆が阿闍世をそそのかして、そして遂に自分のところへ被害が及んできたんだ、自分は被害者なんだと。被害者意識ですね。被害者意識というのは楽なんですが、私た

ちは被害者意識で生きる限り、救われないんですね。被害者意識というのは、いわゆる善人意識ですからね。本当に自分が見えていないということです。

この時の韋提希の気持ちをズバリ言った表現が「未審^{いびん}」ということばです。未だ^{つまび}審らかならず。審はハッキリするという意味です。審判というようにハッキリさせること。未だ自分にそのことがハッキリしていない、分からない。ですから「未審^{いびん}」というのはさっぱり分からないという感じですね。どうでもいいようなことがさっぱり分からないのなら大したことはないんですが、自分として本当に分からなければいけない、そのことがさっぱり分からないという時に「未審」という言葉が使われているようです。

この場面は、阿闍世がこのようになったのは全て私に責任があると、こうなることによって超えてゆくことができるんですね。しかし、韋提希はそれができない。なぜこうなったか、さっぱり分からない。一番大事なところがさっぱり分からない。人間の顛倒^{てんどう}した姿がここに表わされているわけですね。

さらに、「また世尊よ、あなたは一体どういうわけで提婆^{たいば}の眷属^{けんぞく}なんですか」と、お釈迦様を責めてゆきます。あなたのような尊い偉大なお方がどうしてこの事件を引き起こした提婆と眷属なんですか、提婆と従兄弟^{いとこ}なんですか、提婆と師弟関係があるんですかと言って、要するにこの事件を起こした張本人は、あなたじゃないですか、お釈迦様と、こう言うんですね。これは、韋提希の口から出た、一番言ってはならない発言という感じがしますね。人は言うんですよ、そのような言葉をね。一番言ってはいけないことをね。

二三 愚痴の極まりが大きな世界への出発点

それなら本当にこの発言は、一番言ってはいけないことを言ってしまったという、本当に救いようのない発言であったということだけで片づけられるものかという、実はそうではないんです。このように極め付けの発言をするのは、その心の奥底に何かがあるんだということでしょう。韋提希の心の底にあったのは「願わくは仏の慈悲 我に経路を示したまえ」ということなんです。お釈迦様に慈悲を求めているわけですね。「お願いですから、お釈迦様、どうかあなたの慈悲で、私の生きて行く道を教えてください」ということになります。

これは全然違いますね。表面は、お釈迦様を怨んでお釈迦様に責任を持ってゆくという大変なことを言っていますが、そう言っている韋提希の心の底には、お釈迦様の仏としての慈悲の力を認め、その慈悲に対して、どうか人生の本当の生きる道を教えて下さいと、お願いをしているのです。

ここはもちろん、韋提希が真に救われて生きることができるのは念仏の道でしょう。念仏が道なのです。しかし、韋提希にはもちろんそのようなことは分かりませんから、念仏を説いてくださいとは言えない。したがって、経路、即ち人生を生きる道、という一般的な表現になっているけれども、韋提希にとっては精一杯の思いなんでしょう。本当の道を教えて下さいと。その具体的内容が何かは自分には今は分かりませんが、お釈迦様、あなたの慈悲でどうかそれを教えて下さいと。

何か深いところにある思いが爆発するような勢いがここにはありますね。お釈迦様に対して発した愚痴、即ち、「私にこれまでどんな罪があってこのような悪い子が生まれたのですか」ということばの底に、このような韋提希の存在の動きがあったわけです。

この一点が、やがて、韋提希がお釈迦様から教えを聞いていき、ついに阿弥陀の本願の世界を生きる身になるまでの長い歩みの出発点になるわけですね。表面は、愚痴です。しかもお釈迦様に対する。しかし、その愚痴に狂って生きざるをえない現実の底に、将来の大きな救いの世界に至る出発点がある。愚痴が出発点というわけですね。

人生を生きる真の道を教えて欲しいという深い願いがあることは、表面からはとてもそうは思えない。私たちも分かりません。人がひどいことを言っているのを聞いた場合、即座に、お前は何を言うか、となるんですね。しかし、言っている本人においては、その時が同時に変化への第一歩なんです。

そう考えれば、愚痴というのは、それが激しいものであればあるほど、人間の思いの側からの極限の態度なのかもしれません。それ以上は、無明煩惱の者としては態度は取れないのだということでしょう。

お釈迦様は、韋提希からこのように大変な言葉を浴びせられるんですが、韋提希の心の底の、いわば存在自体の願いに気づいておられますから、反発をせず、

韋提希に応えてゆかれるわけですね。いかに韋提希から大変な愚痴や怨みや責任転嫁の言葉を投げかけられようとも、お釈迦様は逃げず、韋提希の傍にじっと立ち続けられるわけです。

二四 仏法と私との必然の関係

あれ程の愚痴を言っておった者が、ついに大きく変る。念仏に生きる身へと変わっていく。これが人間です。特別の誰の話というものではありませんね。お互い私たちもそうなんです。しかし、この「変わる」ということを明らかに押さえていくのは、なかなか大変なことだと思います。この経典はそれを二重に表現するという手法を取っているようです。韋提希の表面の意識と底の動きと。

釈迦牟尼仏として、即ち阿弥陀の本願を説く者として現れたお釈迦様に対して、韋提希の態度は二重でした。表面の意識は愚痴と怨みです。底にある動きは、真実の教えに会いたいという願いです。また、その愚痴と怨みの思いも二重になっています。表面は愚痴そのもの。しかし、その底にあるものは、真に生きる道をお釈迦様の慈悲によって教えて頂きたいという願いです。

仏様というお方は、私の存在のより深い心を開き続けてくださる方なのかもしれません。その深い心を「天人」というもので表わしているようです。私の表面の意識は煩惱によってどれほどにでも愚痴も言い怨みも言う。しかし、私の存在それ自体は、無始以来の、救われたい、解放されたい、真に生きたいという、いのちそのものの原初の願いに常に強く促されてここまでやって来た。だから、私という存在は、真に生きたいという願いを存在の原理にしている者なんだということなのでしょう。

その私たちという存在と、私たちを真に解放する真実の教えとの接点を経典は説くわけですね。今触れています観無量寿経では、これまで述べてきたような内容で取り上げられています。もう一つ、大無量寿経という経典でも取り上げられます。こちらの方が事の経過から見て先でしょう。即ち、大無量寿経では、そもそも、真実の教えと人間とは、どのような関係にあるのかということを読み、観無量寿経では、真実の教えに会う段階で、両者の関係が述べられているように思えます。

大無量寿経に出る天人の場面は次の通りです。お釈迦様がまだ覺りを開く前、山での苦行では救われないことが分かって、^{ふもと}麓へ下りて河で^{もくよく}沐浴をし、個人の悟りを求めるのではなく、人類すべてに共通する悟りを開くのだと、菩提樹のもとで瞑想をしようとして行かれる時に、そこで草を刈っていた少年が、お釈迦様の上に将来悟りを開いて仏陀になる兆しを見出し、これを敷いてほしいとその草を差し出す。お釈迦様は受け取ってその上にベッタリと座る。

少年はその草に、人類すべての者の、仏法を聞きたいという願いを託して差し出したのです。もしあなたが悟りを開いたら、私達全ての者にその教えを説いて下さいと。

この要請を受けたお釈迦様の心の中には、悟りを開いたら人々に教えを説いてゆこうという燃えるような願いがあったかもしれません。ところが実際悟りを開いてみると、その悟った法は、人々の我執を否定する法、人間の我執を照らし破る法だというわけです。それはもちろんそうでないと仏法とは言えません。人間の一番深い自己中心の思い、我執を仏法が照らし照らして遂に打ち破ってゆく、それが仏法だと。

ところが、私達はどのように生きているかといえ、その我執を我が命として生きている。自己中心の思いで生きてる。我執を我が命、一番大事なものとして生きているわけです。その私が、仏法の教えを聞いて、この法が持っている私の我執を照らし破るというのはたらきをどんどんと被っていくということは、誰がそんなことをするものかと言うわけです。我執が打ち破られることは人間の死を意味する。ですから、この教えを説きにお釈迦様がやってきましたら、皆逃げるに決まっている。

このようなことをお釈迦様は気づかれたんですよ。悟りは開いた、仏法が分かった。これを今から説こうというのがさっきの少年との約束だったけれども、自分が説けば人々は間違いなく逃げてゆくと。それで人には説くのを止めて自分だけ深い世界を楽しもうと思われた。それで本当に止めてしまわれていたら我々は救われないんですね。さあ、どうするかです。

その時に現われたのが天人なんですよ。天人が現われて、お釈迦様をお願いを

する。どうか説いてほしいと。それでお釈迦様は承知なさせて、説こうということになるわけです。天人は大きな役割を果たしています。もしそこで天人が現われなかったらどうであったか。

その天人が観経と同じように、私なんです。私の意識というよりも、存在それ自体の願い、根本の願いと言ってもいいようなものです。私は我執を命として生きているけれども、本当の私の願いは真実に遇いたいことなんだ。真実に遇う教えを聞きたいことなんだと、我執を超えて存在それ自体が、即ち私の全存在を挙げてお釈迦様に説くことを請うた。これが仏法の正体なんだということなのです。

仏法の教えは、誰か他の人の為に説かれていて私は関係ないというのではありません。私がお釈迦様に説いて下さいとお願いをした教えなのです。このところはそういうことを現わしているのではないかと思います。ここに仏法と人との根本の関係が説かれているように思います。仏法と人間は必然の関係にあります。即ち、この法は、私が請うた法、つまり私のための法であるということ。そして、私の我執を打ち破る法であるということです。私たちがいのちにしてしている我執が、法にとっての縁となって私の救いがあるということですね。ですから、絶対に私たちは仏法によって救われるということです。

二五 存在それ自体による教化

さて、ここからお釈迦様は一つの戦略に入るわけです。韋提希に対して自分が釈迦牟尼仏として、阿弥陀の本願、南無阿弥陀仏を分かってもらいたい。本願の大いなる世界に生きる身になってもらいたいのです。勿論直ちに分かるということはない。では、どのような説き方をしていくかという問題です。そのところを、出発点に立つという視点で考えてみましょう。

先ず、沈黙の説法です。沈黙の説法、一寸^{ちよつと}矛盾した表現ですが、仏としての存在の力にものを言わせるんですね。「存在がものを言う」ということばがあります。一家の主人が家の中でどっしりとしておれば、何かその家は大丈夫という感じがします。存在がものを言うわけです。お釈迦様は初めのこの段階において、特別に何かを説くというのではない。何もされないような形で韋提希の側におられるのです。逃げはしないんです。韋提希の前を動かないんですね。けれども、

お釈迦様は釈迦牟尼仏ですから、その仏であるということが、韋提希に自然に影響を与えていくわけです。

あれ程荒れ狂った状態の韋提希が、何もおっしゃらないお釈迦様を前にして、次第に荒れた心がおさまってきます。人生なんてどうでもいいやと思っていた心が、段々と願いに集結していいくんですね。願いをおこすようになるんです。先程は責任を転嫁して、自分は正しいんだと自己正当化する方向にどんどん向かっていたわけです。その限りでは人生に対する願い、真実を求めていこうという願いはおこりませんね。その願いをおこすようにお釈迦様は仕向けていくわけです。

具体的に、こういうことがあったから韋提希は自暴自棄の状態から願いをおこす者へと変わりました、ということは書かれていていません。その次元で人間の心がどうなったかということとはなかなか分からないことでしょうね。ただ言えるのは、この沈黙の説法が実際に力を持つということでしょうね。

私たちの場合、自分が何にも分からない時に、既にこの仏法の道を歩んでいる人の存在が大ききものをいうことがあります。その方が私に何かを言うとか、何かをするとかもあるかもしれませんが、それよりももっと深く力を持っているのは、その人の存在そのものです。場合によれば、その人の発言のほうに枝葉末節ということもあるでしょう。その人が現にこの道を歩んでいるという事実が、私に大きな力を与えるのです。この具体的な人の大切さが言われているように思います。

これは本当に何と言うか、一人の人でもいいから、真にこの仏法の道を歩んでいる人がいるという、ハッキリとした認識を持つ、具体的にその人を知っていることは非常に大事だと思えますね。私達はそれから物凄く力を与えられるのです。

このことは分かりやすいことだと思えます。私自身も、早くからこのことの大切さを十分納得していたように思います。しかし、最近、改めてこのことの大切さを痛感しています。私は先生から二十余年間教えを説いていただきました。しかしいつまでたっても要領の得ない、はっきりしない者だったのですが、先生が亡くなられて七年ほどたちますが、次第に先生の存在の大きさというか、確実さと言った方がいいようにも思いますが、そのようなものを強く知らせて頂くようになりました。

「確実さ」というのは、先生の上に阿弥陀本願の教えがはっきりと表れているという意味合いです。先生を憶うと、そこには仏教の全体がある。私の歩む道が明瞭に示されている。一瞬、先生のことを憶うだけで、大きな世界に触れ、太い軌道に立たされる思いがするのです。次第にそのようになりました。先生とはどのような方であったのかということを探る以上に、これから先、先生とは何なのかが次々と示されてくるのではないかという思いがします。不思議なことだと思えます。

二六 自分の道は自分で選ぶ

段々と進んで、出発点に立つにあたって一つ大事なことは、道を自分で選ぶことです。韋提希が自分の思いで道を選ぶ。自分の判断で、私はこの道を行きますと決断する、これがたいへん大事なことです。

韋提希はまだあまり仏法のことを考えもしないのに、お釈迦様が出てきて、韋提希よ、お前が行くべき道はこれなんだぞ、と言ってはダメなんです。人が何かをなしていく上での大事なポイントは「責任」ということなんです。責任感ですね。自分の歩む道は自分で責任をもって選び取ることが大切なのです。いくら、阿弥陀の教えを聞く道であろうとも、それを自分で選び取らねばならない。人から選んでもらっては駄目です。

なぜかと言えば、歩んでいく上で何か不具合が起ると、自分で受けとめることをしない。この道はあの人が行けというから行っているのだ、こんなことになるのはあの人の責任だ、と言って現実を受けとめないのです。それでは自分の道とは言えません。ですから、お釈迦様は韋提希自身に道を選ぶのです。

韋提希が自分で選ぶからと言っても、韋提希一人だけではできません。お釈迦様がいなければならない。お釈迦様がいるからと言っても、韋提希にすべてを教えてはいけません。ここにお釈迦様の大変なご苦労があるわけです。お釈迦様はどのように韋提希に対していかれるのか。微に入り細^{うが}を穿つことは今は措^おきますが、大まかな戦略はおよそ次のようではないかと思われま。

沈黙の説法によって韋提希の荒れた心は次第におさまり、ささやかながらも願いが起って来て、それが自分を動かすようになります。お釈迦様を前にしてその

願いは次第に純化し強くなり、真実を元にしてできている世界を教えてほしいと願います。それに対してお釈迦様は沢山のその世界を韋提希に見せます。皆私たちの国です。韋提希はそれを見せてもらって、そこで、お釈迦様は抜きにして、自分一人で考えるのです。どの世界に自分は行こうかと。考え抜いて韋提希は自分で決心します。これらの仏たちの世界はどれも皆素晴らしい。しかし私は、これらの国を作っているおおもとの、阿弥陀の世界を生きたいと。これが、韋提希が阿弥陀の国を自分で選ぶまでのおよその流れです。

この戦略の大切なポイントは、韋提希に行ってほしい阿弥陀の国そのものは隠してあるということです。しかし、ヒントは沢山出すのです。そして、韋提希に選ばせる。示されたヒントから答えを見出すまでの「距離」を作っておかねばなりません。初めから答えを示されたら、答えにいたるまでに自分が力を発揮する「距離」がないわけですから、その答えは自分のものにならないのです。聞法は、答えを聞くのではない、問いを聞くのだと言われる所以です。

道は自分で歩む。教えを聞き、沢山の師友に支えられながら、自分で歩む。自分で歩むということは、ある意味で人間本来の願いではないかと思えます。日記を書くということがあります。皆さんもそうかもしれませんが、自分の歩みを日記に書き留める。書き留めたものを残すということもあるでしょうが、「書き留める」という行為そのものに意味があるように思えます。これが、自分の道は自分で歩みたいという、求道的本能のようなものがなさしめているのではないかと思われます。岸壁にハーケンを打って一步一步自分の足で登っていくのです。

決心する時はどこかに籠って一人になって決心するといい、という面もあります。このことは大事なことです。親鸞聖人は、經典のこの場面のところを読み替えをなさって、韋提希は自分で決心をしたんだということを敢えて強調するように読まれています。お釈迦様は韋提希に対し、沢山の仏たちの国を示される。その時も、「教える」というような答えを示すような表現ではなく、「現わす」という表現が使われます。お釈迦様はただ現わされたただけなんだと。その現わされた仏たちの国々からどれを選ぶかは韋提希次第なんだ、という感じです。敢えて答えは出さず、突き放すようなものです。ここには韋提希の人間としての主体性を最大限に尊重した配慮があります。この主体性が発動しなければなりません。

仏たちの国を説き終ったお釈迦様は、ただそれを韋提希に示すだけで、その先は何も言われず、よそを向いてしまわれます。そして、しばらくして韋提希の方に向き直ってみると、果たして、既に阿弥陀の世界に生まれたいと決断した韋提希がそこにいたのです。このような意味合いになるように聖人は読み替えられているんですね。韋提希が選ぶその時間帯は、お釈迦様はよそを向いていて、何も手を加えていませんよ、彼女は自分一人で選んだのですよ、ということをはっきりと表わそうというのでしょうか。

材料は提供する。提供してもらった材料を、さあどうしようかという時は、もうそこを去る。あなた一人で考えなさい。一人で決心しなさい。厳しいと言えば厳しいけども、本当にそれが自分の道になる為にはそうでないといけない。

しかしここでもう一つ大切なことは、韋提希が自分で選ぶことができたのは、韋提希の力だけによるのではなく、実はお釈迦様の大きな力の中でのことだったという認識です。阿弥陀の本願の教えを聞いていこう、これを自分の生涯の道にしようということは、自分だけで決められるものではありません。もし「自分だけ」を強調すれば、教えを聞かず、師友とも交わらないところでの選びとなり、独断に陥るでしょう。そうではなく、お釈迦様という仏法を生きている方から最大限の教化を受けて、そこで初めて自分で選ぶことができるのです。そのことを忘れてはいけないのですね。

一人の人が、本願の道を自分で選び、自分の道として歩み始めることができるようになるために、周囲の方々がいかに配慮し、工夫を凝らし、考えに考えてはたらきかけをなされたか、そのことに対して、歩みを進めていくうちに、次第に、大変なご恩であったと思わせて頂くようになるのです。

二七 私自身が照らされる歩みの始まり

こうして韋提希は出発点に立ちます。これまで大変な事情の中にあつた人が、ついに本願の教えを聞く道に立った。それはうれしいことであって、ファンファーレを鳴らし、紙吹雪でもまいて出発を祝おうという感じですね。それはそれでいいんですが、同時に出発する彼の心の底はどうだろうか。今から頑張りますと

言って出発したんだから、彼の心の内はさぞかし純粹であろうと、彼の中に何か真実がみなぎっているであろうと思うでしょう。まったくそうじゃないんですよ。

出発という言葉は、そういう何か^{すがすが}清々しさというか、純粹さというか、そういうものを連想さすような出来事だと思っただけけれども、実際はそうでないんです。そのところをよく踏まえておかないといけません。問題を一杯持ったままで人は出発するんです。いや、問題をいっぱい持っているから出発できるんです。問題がなければ出発できない。出発して歩む必要もないわけです。これが私達の出発の特徴です。

頑張りますと、今からこの教えを聞いてやっていきますと言うと、勿論、それは素晴らしいんです。しかし同時に、何と言うかな、あなたの中には出発の清々しさと同じような真実の心が溢れていますね、ということではありません。ですから、素晴らしい、これから一緒に頑張ろうと言うと同時に、まあこういうことを言う必要もないんだけど、ごくろうさん、これから人間を生きるということが始まるんだね。自己を知らされて生きるという生涯の仕事を始めるといいます。

この時期に^{ちょっと}一寸分らないことがあるんだと思いますね。それは、この教えによって自己を照らされる、その歩みをすると言うけれども、これが分からないんですよ。なぜこれが私の仏教の道になるのかと。教えによって自己を照らされたら大変なことになるんじゃないかと思えるんです。だから、これまで、照らされまい照らされまい、知らされまい、知らされまいとしてきたわけですよ。勿論相手は仏法の教えではないにしても、世間の人目の対しても、自分のことを知らされまいとして、カムフラージュしながらうまくやってきたわけです。

それをもし、自分の全てが照らし出されたら、もう一巻の終りじゃないかと思うんです。私も、いやという程これを思いましたね。だから自己を照らされるということが分からない。これがどういうことを具体的に指しているのかがね。

照らされて私が明らかになるということは、この世界が明らかになることなんです。この世界が明らかになることと、私明らかになることが一つのことなんです。一つの認識なんですよ。それが初めは分からない。この広い世界が明らかになるということが、阿弥陀の世界、浄土が明らかになるということですね。阿

弥陀の世界が明らかになる。

私達は教えを真剣に聞いていって、そこに明らかになってくるこの世界には、二つの内容がある。一つが、私とは何であるかが明らかになること。もう一つは、阿弥陀仏が何であるかが明らかになること。

自分が明らかになる。明らかになった自分はどういう自分か。これまでも自分とは何かとそれなりに考えてきた。しかし、阿弥陀仏という真実なるものを相手にしないと、自分が何であるかは明らかにならないんです。だから私たちにとって、仏教の教えを聞くことに意味があるのです。この教えが鏡ですからね。鏡の前に立たないと自分が見えない。

教えの鏡の前に立ち続けて見えてくる自己、それが本当の自分です。自分の真の正体です。阿弥陀の教えの前に立って、私たちは初めて自己の本当の姿に出会う。それは、その真実である阿弥陀をまったく無視し^{そし}謗って生きている私であったということです。

韋提希も、配慮に配慮を加えられたお釈迦様の教えを聞いてゆきながら、ついにこのことに目覚めるのです。自己の真の姿に出会うのです。それは同時に、その自己を抱いて立ち上がった阿弥陀の大いなる慈悲の心にまた出会うのです。教えに照らされる自己というけれども、ただ自分が何かの光に照らされているだけということはありません。照らされている大きな光の世界の中に私がいるのです。私が照らされるということは、照らす大いなる光があるのです。その光の世界の中に私がきちっと位置づけられている、そのことに目覚めるのです。

韋提希が聞いていく教えそのものについては申し上げる時間はありません。今回は、観無量寿経の序分のところを拠り所にして、仏と人間との出会いの場面から、人間の目覚めと救いということについて考えてみました。

(完)